

『俺サマ白狐のお気に入り♥』

著：高月まつり

ill：明神 翼

ああ、これは夢だ。

時代劇に出てくるような立派な座敷に胡座をかいて、啓介はそう確信した。

凄いことに、新しい畳の匂いまでする。

「明晰夢、だっけ？ こういうの」

どうせなら、Tシャツとスウェットじゃなく着物だったら様になったのに。

そう思った途端に、啓介は着物姿になった。

「マジか。すげえな、夢」

両サイドの襖には、素晴らしいとしか言いようのない、麒麟や鳳凰などのめでたい動物が描かれている。

「俺の夢に招待させてもらった。こっちの方が、お前に話をしやすいと思ったからな」

気持ちが引きしめる凜とした声に、啓介は慌てて顔を上げる。

そこには、狩衣姿の雷火がいた。髪が伸びて、畳にかかっている。

服と髪が白銀にきらきらと光っていて、決して認めたくないが神々しい。

「は？ あんたは、ただの怪しげな子持ち無職じゃなく……妙な術も使う男なのか？」

「妙と言うな。これでも俺は神格を得ていて、お前たちの言う『神』の一人だ。敬え」

「……季節だけじゃなく、人の頭の中まで春になってしまうとは、日本の気候はどうなってるんだよ」

「だから俺は神格を得た白狐だ。神だぞ、神！ 少しは真面目に話を聞け、こら」

雷火の背後で、白くて大きくてふっさりとした尻尾的なものが、もふっと動いた。

なんだあれは……っ！ 俺の夢に必要な物なのか？ あのモフモフは……っ！

必要かどうかは別として、もの凄く柔らかそうな毛並みなので、とりあえず触ってみたい。

「それは本物か？」

できるだけさり気なく、「見えたから聞いてみただけなんだからね！ 別に、尻尾に興味があるんじゃないから」という態度で、雷火の尻尾を指さした。

「応とも」

雷火は言うが早いか、白い尻尾をモフッと動かす。

「そ、そうか、本物か……でもこれは夢だから、触ってみないと本物かどうか分からないな」

夢という時点で本物も偽物もあったものじゃないが、尻尾に触りたい一心で啓介は澄ました顔でそう言った。

「触りたいなら触っていいぞ？ 触っても減ったりしない。御利益が……ああ、御利益に関しては、お前は必要なさそうだがな」

「よし、じゃあ触る。噛むなよ？」

「失敬だなお前」

「だって、犬猫は尻尾を触られるのいやだろ？ あ、狐ってイヌ科だっけ？」

酷いことを言っている自覚はない。今はただ、とにかく、その柔らかそうな尻尾に埋もれたい。そして啓介は、両手を雷火の尻尾に埋めた。

柔らかいし、何かいい匂いがする。

「うわあああああ……」

啓介は、自分の記憶の中にある最も柔らかいものを思い出した。

あれだ。ひよこだ。いや兔の毛だ。子猫の毛だ。とにかく……それらを合体させた柔らかさだ。ぬいぐるみの触り心地もいいが、こっちは極上だ。

「なんで、こんな……っ、夢なのにつ、こんなに指先に感触がダイレクトに……っ、ああもう、気持ちよすぎてヤバイ……っ」

柔らかい上にいい匂いがする尻尾なんて最高だ。これを枕にしたら最高の寝心地に違いないと思う。

「堪能してくれて幸いと言っておこう。……で、ここからが本題なんだが」

啓介はモフモフ尻尾を抱き締めながら「なんだよ」と首を傾げる。

「この土地を寄越せとは言わんから、せめて社を建ててくれ」

建ててもいいか？ ではなく、建ててくれとは如何なものか。

それでなくとも雷火は「土地を寄越せ」と、まるでそれが当然のように言っていた。

「……それは、あんたが神様だからか？」

だから社のお話をしたり、啓介の魂のお話をしたというのか。

「そうだ」

「だったら、なんの神様だよ」

「手っ取り早く言うと、家内安全、商売繁盛だな！ 社が大きくなったら、もっといろいろなことができるぞ」

胡散臭い。とっても胡散臭い。

啓介は眉間に皺を寄せて、雷火の尻尾から手を離れた。

「高価な壺とか、高価な調理器具のセットとか、俺に売りつけようってのか？ 悪いが、そんな余裕はない。なんてたって俺は、御倉食堂を改装するために金を貯めてるんだから！」

「いやいやいや、神はそんなものは売りつけたりしない。それは商売だぞ、啓介」

言われて気づいて赤面した。

確かにそうだ。人の心の弱いところを突いてくる商法だ。ワイドショーで見たことがある。

「それは、その、悪かった」

「悪いと思うなら、その貯めた金で社を建てろ。この土地とお前と陽子を守ってやる」

「何言ってるんだ。やだよ。それに食堂の改装は、何年も先だ。まだまだ見積もりの金額には届かない」

そう言ったら、途端に雷火がしょんぼりした顔を見せる。

「おい、一児の父がそんな情けない顔をするなよ」

「九本の尻尾を奉納して、ようやく神格を得たというのに、俺の社がないなんて、俺が可哀相だと思わないか？ 探し尋ねて数百年、ようやく俺の社を建てる場所を見つけたというのに」

九本の尻尾は、妖怪じゃないか。妖怪だろ。高原君の持っていた本にそんなことが書いてあった。なのに神格だと？ 俺は狐に馬鹿にされているのか？ 何百年も住むところを探したってのも、変な話……。

啓介は腕を組み、じろりと雷火を睨む。

「神様どころか妖怪かよ。九尾の狐って妖怪がいる。那須の殺生石の……」

「あれと一緒にするな、あれと。俺は稲荷神社で立派に修行をして、こつこつと尻尾を増やした白狐だ。尻尾が十本生えたところで、九本奉納して神格を得たんだ」

雷火の大きな一本尻尾が、モフンと揺れた。

「……え？ そんなしきたりがあるのか？ 九本も尻尾を切ったのか？ 勿体ないっ！」

一本でもゴージャスな尻尾が、あと九本もあったなんて。それを奉納してしまっただなんて。一度でいいから十本のモフモフ尻尾に埋もれてみたかった。

「今頃はあの人のインテリアにされているだろうさ」

「だ、誰に奉納したんだよ……」

「俺が修行をしていた先の神だ。火嵐の修行先にもなる」

相手が神様なのか、だったら「一本譲ってくれ」とも言えない。

啓介は「まあ、本体がいるし」と納得することにした。

それよりも、この白狐には聞かなければならないことがある。

「この土地は、神様たちにとって本当にいい土地なのか？」

「神たちもそうだが、とにかく、雷火という神にとって最高の土地だ。なぜなら、啓介もいるからな。素晴らしい土地と、美しく素晴らしい魂を持ったお前。その二つが揃って、俺を迎え入れてくれた。最高だ。お前の傍にいと、俺の毛づやはどんどんよくなっていく。啓介を守る力も強くなる」

お前がいるから強くなれる……なんて言われると照れくさいし、認めるのは悔しいが嬉しくて心臓が高鳴る。

「本当に……神様？ 雷火は神様……？」

「いつもなら、くどいと腹を立てるところだが、今ばかりはすべて許そう。俺は寛大な神だ。そして、お前をすべての災いから守ってやろう」

「そっか……でも俺はそもそも……そんな大怪我なんてしたことねえし。というか、その手に関しては、俺は自分でも信じられないほど、運がいい」

友人たち曰く「守護霊が凄そう」らしい。

「それだけ美しい魂を持っていれば、そりゃあ皆助けたくもなる。……ところでお前、本当に人間か？ 人間にしてはちょっと……」

「お、俺は生まれてから今まで、ずっと人間です！ あいにく尻尾も羽もねえよっ！」

「んー……。生まれは？ 両親はどこにいる？」

「両親はここにはいねえ。詳しくはぼーちゃんに聞け！ 俺は知らん！」

と言うか、あっちはあっちで好き勝手やってるし……。

祖母と二人の生活は長く、なかなか楽しいのだ。

「まあ、追々分かるだろう。その魂は、人間が簡単に持てるものではない、なかなかの一品だ。低俗な輩に奪われないよう、この俺が守ってやる。簡単に殺されるなよ？」

よしよしと、またしても頭を撫でられた。

どうもこの男は、啓介の頭を撫で回すのが癖になったようだ。

そして啓介も、雷火の手の感触が心地よくなってきて、「やめろ」と言うのをやめた。

「俺が殺されるわけねえだろ。物騒だな。……俺を守るってことは、もしや、近々またしても御倉の土地を欲しがらる奴らが来るってことか？ たまに乱暴な連中も来るんだよな。明晰夢は予知夢でもあるのかよ。すげえな俺、こんな夢を見られちゃうなんて！」

「あ、いや、そういう意味で言ったんじゃないが……まあそうだな、俺がここに住まっていることを知れば、この土地を欲しがっていた同輩はさぞかし悔しがることだろう。清々しい！」

にやりと、意地の悪い顔で笑う雷火に、啓介は「神様って嘘だろ」と突っ込みを入れた。

「今まで、こうしてお前に話しかけてくる輩はいなかったのか？ 社を建てろとか、魂を寄越せとか」

「こんなおかしいことは、あんたが初めてだ。まったく、神棚じゃだめなのかよ。困った神様だな。社は簡単に建てられねえだろ」

すると雷火は、「俺が求めているのはそれじゃない」という顔をする。

「うちの土地神に申し訳が……って、そういえば白狐がどうしてウカノさんと知りあいなんだ？ もしかしてウカノさんの家から追い出されたとか？」

「お前らは『さん付け』して人間づきあいをしているが、あの人は神だ。五穀豊穰の宇迦之御魂神。稲荷神社の主祭柱の一人だ」

雷火が難しく長い名を口にした。

ピンと来ない。

うんうんうんと頷く中で、神の名が頭に浸透していく。

そして啓介は、突然「ええええええっ！」と大声を上げた。

「え……？ ウカノさんが？ ウカノさんが神様？ マジかよ！ 料理研究家なのに神様！ マジかーっ！」

五穀豊穰なら、そりゃ現代で料理研究家にもなりますよねっ！ うわあああ！ 俺、神様と浅漬の話とかしっちゃったよーっ！

啓介は両手で頭を抱えて「神様ヤバイ！」とまたしても叫ぶ。

「この国の神は意外と庶民派で、よく街中を闊歩しているぞ」

「いや、まさか！ 神様がうちの食堂に通ってるって、まさか！ 嬉しいけどっ！ ビビるだろっ！」

「そしてもう一つ。知らぬはお前ばかりなり」

つまり、祖母の陽子やバイトの高原は知っていたことになる。

どうして教えてくれなかったんだという気持ちもあったが、仮に彼女が本物の神だとしても、

今までと接客が変わることはないので、「わざわざ言う必要がなかった」というところに落ち着いた。心臓に悪いが、きっとそういうことなのだ。

そういうものだ。相手が誰でも、「御倉食堂」は常に出来たての料理を出す。

「俺、神様にドヤ顔で料理を出してたよ……。うわああ……。穴があったら入りたい気分だ。凄く恥ずかしい……」

「素晴らしい魂を持っていても、相手の真の姿が見えないのか。勿体ない。俺が見方を教えてやるか？ 何、簡単だ。こうして、互いの唇を合わせて……」

雷火が笑顔で顔を近づけてきたので、啓介は右手を彼の顔に押しつけて「やめろ」と言った。

「これぐらい簡単だろうが」

「あんたは神様だろ！ 人じゃない。そして俺と性別も一緒。全部ひっくるめて無理！」

「この国には古来から衆道というものが存在してだな、こう……。念友として……」

「いやいやいや、言葉の意味は知らないが、ニュアンス的に理解した。あんたは綺麗でキラキラしてるけど、だからといってキスはできない。そして俺は、余計な物は見えなくていいし、感じたくもない。一人で風呂に入れなくなる」

おそらく啓介にとって一番大事なのは、雷火とキスはできないということより、一人で風呂に入れなくなったら困る、だ。

「神格の白狐と唇を合わせられるなんて、誉れもいいところなのに、どうしてそこまで拒絶する。俺が傷つくぞ」

「あー……。傷ついたなら悪かった。俺は一般庶民のままでいい。あんたの厚意は気持ちだけ受け取っておく」

「いきなり奥ゆかしくなったな。せっかくだから貰っておけ」

雷火が笑顔を浮かべながら、啓介の両肩をがっちりと掴む。

これは自分の明晰夢だから、自分のいいように動けるはずだと思ったのに、雷火から逃れることはできなかった。

「え？ ちょ、おいっ！ 俺は、こんな得体のしれない生き物とキスをするわけにはっ！」

肩を強く掴まれたまま、唇を押しつけられる。

その途端、啓介の体の中に炭酸水のようなシュワツとした刺激が生じた。

何度か唇同士が重なり、舌先で舐められる。くすぐったくて顔を背けようとした瞬間に、今度は噛みつくように口づけられた。

「は……。っ、ううっ」

文句を言おうと口を開けたのが良くなかった。

雷火の温かな舌が啓介の口腔に入り、くちゅくちゅと音を立てて中を愛撫する。

ああくそっ！ 人じゃない生き物とキスしてるよ俺っ！ どんなに綺麗でも相手は男だろ！ いやいや狐だから雄だろ！ しかも神様とか言ってるし！

頭の中では雄弁だったが、それも束の間、唾液がしっかり混ざり合った頃には、啓介は顔を真っ赤にして体を震わせた。

体の中心が熱く猛って着物を押し上げているのが恥ずかしくて、慌てて両手で隠すが雷火にし

っかり見られてしまった。

「童貞でもないのに初々しいな。ますます気に入った」

雷火は晴れやかな笑顔で、啓介の頭を撫で回す。

この状態で触らないで欲しかったが、何か言われるのが悔しくて、啓介は唇を噛んで黙った。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>